桜と「国民」

中　本　真 生 子

はじめに

「桜がわかると日本人がわかる」。これは『桜文化と日本人』と題された本の帯に書かれた一文である。公式には定められていないものの、桜は広く日本の「国花」とみなされている。今から80年以上前、1937（昭和12）年に日本を訪れたヘレン・ケラーは、満開の桜（映像を見る限りおそらくソメイヨシノだろう）の花びらに触れて「これが日本の心なのですね」と呟いた[1)]。桜＝「日本の花」、このイメージは今日、内外に広く共有されている。

しかしそのイメージがどのように形成されてきたのか、またそれが明治以降、「国民国家」としての日本を構築する上でどのような役割を果たしてきたのか、そして果たし続けているのかについて、一般の人が意識することは少ない。また今日、日本の桜の8割以上を占める「ソメイヨシノ」が、江戸末期から明治初期の頃に誕生した新しい品種であることを、つまりソメイヨシノが誕生する以前の春の光景や桜のイメージが今日とは大きく異なることを意識している人は、さらに少ないだろう。実際、筆者が大学で担当する「比較文化論」の授業内で、ソメイヨシノが近代になって新たに現れた（作られた）桜であり、接ぎ木によって増える、つまり同じ遺伝子を持つ「クローン」であることを話すと、例年、学生たちは「衝撃を受けた」「ショック」と驚きを隠さない。またNHKの人気番組「チコちゃんに叱られる」が、レギュラー放映第1回の2018年4月13日に、「なぜ桜は一斉に咲くの？」という質問を用意したのは、このようなソメイヨシノの来歴が一般には知られていないからこそであろう。

本稿では、様々な分野、様々な形で研究が進んでいるにもかかわらず、未だに一般の認識との間に乖離がある「桜」、特に「ソメイヨシノ」と日本という国家、そして日本人という「国民」の関係を改めて見直すことを目的とする。西川長夫が作成した、近代国民国家における「国民統合」と「国民形成」の表[2)]に従うなら、「桜」は「国民的な様々なシンボル」の項目および「空間の国民化」「時間の国民化」の項目に位置付けられよう。以下、桜という樹木の変容と、そのイメージの変容を通して、「日本人」という国民を想像／創造し、維持する文化装置としての桜の、今日まで続く機能について明らかにしていきたい。

1）NHKエンタープライズ「映像の世紀11、JAPAN」。
2）西川長夫『国民国家論の射程』柏書房、1998年（見開きの表1および表2参照）。

1．ソメイヨシの以前の「桜」

「ソメイヨシノ」という桜の一品種が、江戸時代末期にオオシマザクラとエドヒガンの交配によって誕生し、明治時代以降、植木職人による「接ぎ木」によって広がっていったことは、（詳しい時期や場所などについては諸説あるものの）様々な分野の研究者の見解が一致するところである。つまりソメイヨシノの誕生と拡大は、日本の近代と歩みを共にしてきたと言える。この、「葉が出る前に花だけが一斉に咲く」という特徴を持つ新たな桜は、「桜」のイメージと、日本の「春の景色」そのものを大きく変えた。本章ではまずソメイヨシノ以前の桜の歴史を概観していく。

日本（朝廷および歴代幕府の勢力範囲）には、古くから「桜を愛でる」という習慣や心情が存在した。多くの和歌が様々に桜を詠み、多くの物語のなかに桜が登場し、能や歌舞伎の演目にも、桜に関わるものが多数存在する。

しかしその一方で、桜が一貫して今日のように親しまれ、歌われていたのではないことも指摘されている。桜を詠む和歌が増えるのは平安時代に編纂された『古今和歌集』（10世紀初頭）からであり、それ以前、例えば8世紀半ばに成立した『万葉集』に詠まれた植物は、1番多いものは萩、2番目は梅、桜は8番目という少なさである[3)]。京都御所の「右近の橘、左近の桜」も、平安中期までは「左近の梅」であった。なぜ「萩、梅」から「桜」への変化が起こったのかは専門の研究に委ね、ここでは「桜が特別ではなかった時代もあった」ということを、ひとまず確認しておこう。

さらに、平安時代半ば以降多くの歌に詠まれ、愛でられるようになった「桜」が、実に多様、多彩な姿形であったこと、そして「桜の名所」の在り方や、「花見」の仕方も今日とは大きく異なっていたことも、ここで併せて確認しておきたい。ソメイヨシノが誕生する以前、「桜」と呼ばれる花は、実は様々な形（山桜、八重桜、枝垂桜など、花弁も一重咲から八重咲、菊咲など）を持ち、色も白い花弁から濃い紅色（赤）、また黄緑色の花[4)]まで多彩であった。西日本ではヤマザクラが主流であったが、中部から東日本にかけてはオオヤマザクラやエドヒガン、南関東にはオオシマザクラが多く、またそれらの桜の大半が実生から育つため、様々な形で自然交配が起き、例えば「ヤマザクラ」と言っても一本一本、形や枝ぶり、花の色、形も、そして開花するタイミングも異なっていた。ソメイヨシノ誕生以前、江戸時代まで、人びとが見ていた桜は、「地域によって違う」、「1本1本違う」ものであった[5)]。

そのためソメイヨシノ以前の「桜」は咲く時期も様々で、ある桜が散る頃には別の桜が咲く、という風に早春から初夏まで楽しまれるものであり、花見もあちらこちらの桜を1ヶ月以上にわたって楽しむものであった。今日「桜の名所」として名高い京都の平野神社は、ソメイヨシノの群生とは別の一画に60種にのぼる古い桜を有し、同神社のホームページは「長い間（約1ヶ月半）に渡って桜を愛でることができます」と紹介している。

「花見」自体も今日とは異なり、貴族や僧侶が名木（一本桜）を歌に詠む、という形が基本であっ

3）水原紫苑『桜は本当に美しいのか』平凡社、2014年、25頁；七海絵里香、森崎翔太、大澤啓志「万葉集および平安期の勅撰和歌集にみる植物に対する行為」『日本緑化工学会誌』39-1、2013年、74-79頁。
4）例えば御衣黄（ぎょいこう）桜は黄緑色の花弁を持つ。
5）佐藤俊樹『桜が創った「日本」』岩波書店、2005年（以下、佐藤（2005）と略）、8頁。

たという[6]。室町時代には、名木の下で「連歌を詠む」という娯楽が徐々に貴族以外にも広がったという指摘もあるが[7]、一般の人々が桜の群生の下に陣取り、飲食しながら花を楽しむという「花見」のスタイルは、江戸中期、徳川吉宗が墨田川や玉川上水の堤を強化するために桜を植えさせ、また鷹狩で勢子として動員された民の不満を逸らせるため、飛鳥山、向島、御殿山などに桜を植えさせ庶民に開放したことがきっかけで広まったとされている[8]。

このように「桜を愛でる」「花見をする」という習慣、娯楽は長い歴史を持つが、その一方で、同じ「桜」という言葉が使われながらも、「見ているもの」「楽しみ方」そして「春の景色」そのものが、今日のそれとは大きく異なるものであった。この「多様な桜」の景色は、いつ、どのようにして、そしてなぜ、「単一の桜」（ソメイヨシノの群生）へと置き換わっていったのだろうか。次章では、それについて詳しく見ていく。

2. ソメイヨシノの誕生と拡大

ソメイヨシノの誕生と拡大については、社会学、歴史学、文学、植物学など、様々な分野からの詳細な研究がなされている。これらの先行研究からは、ソメイヨシノが①明治初期に「吉野桜」という名で、東京の植木屋から売り出されたこと、②「葉が出る前に花だけが咲く」という特徴から人気が出たこと、③日清、日露戦争の勝利を記念しての植樹がきっかけとなり、全国的に広がっていったことが確認されている。さらに④国内だけでなく植民地（台湾、朝鮮半島、満州）に、また日中戦争がはじまると中国の日本軍占領地にもソメイヨシノが植樹された。

国内でソメイヨシノが植えられたのは、明治政府によって制度化された学校の校庭、軍隊の駐屯地、藩が廃された後、公園となった城跡、河川工事後の堤、神社や寺などであり、また植え方として、1本ではなく群生（並木）で植えられるという特徴があった。軍隊、学校、公園などの公共空間、堤防や道路、線路などのインフラ設備、そして植民地の同様の空間へ。このように近代国家・帝国の建設と連動した「ソメイヨシノ」の拡大について、もう少し詳しく見てみよう。

佐藤俊樹は、「この桜がどこで生まれたかについては諸説あり、決着はついていないが、江戸末～明治初期に江戸／東京に姿を現し、全国へと広まっていった」とし、初期の植樹の例として靖国神社の事例を挙げている[9]。勝木俊雄も、正確な記録は残っていないとしながらも、江戸時代末期に江戸の染井村の植木屋が「吉野桜」という名で売り出したとしている[10]。葉が出る前に花だけ

6）同上、19頁。
7）白幡洋三郎『花見と桜―〈日本的なるもの〉再考』八坂書房、2015年、164頁。庶民の「花見」に関しては、農民の「春山行き」「春山入り」と呼ばれる慣習（豊作祈念）に起源が求められることも多い。
8）同上、138頁。もちろん徳川吉宗が植えさせた桜はソメイヨシノではないが、国家権力による「桜」の利用が、ソメイヨシノ以前から行われていたことがわかる。
9）佐藤（2005）、64頁。戊辰戦争で命を落とした「官軍」側の死者を悼むために建てられた神社（招魂社）であり、その後日清、日露戦争、シベリア出兵、そして太平洋戦争において戦地で「散った」兵士の魂が戻るとされた場所である。ソメイヨシノと兵士は、明治の出発点から結びついていた。
10）勝木俊雄『桜』岩波書店、2015年（以下、勝木（2015）と略）、40頁。2022年3月には、財団公益法人かずさDNA研究所が、ゲノム解析の結果、上野公園のソメイヨシノのなかで、原木に最も近いものを特定したと発

が一斉に咲き誇るこの新しい桜は、古来より絵に描かれてきた「理想の桜」「夢の桜」の実現として人気の品種となった。成長が速いこと、接ぎ木の定着率が高いこともこの桜が好まれた理由であった。

そしてこの「オオシマザクラ」と「エドヒガン」の交配種は、その特徴を守るために「接ぎ木」で増やされていった[11]。京都の庭師、16代佐野藤右衛門（3代目「桜守」）[12]はソメイヨシノについて、「人間が作って、人間が植えたものやから、最後まで人間がかかわらんと育ちませんのや」と述べている[13]。

ソメイヨシノの植樹が本格化したのは明治後半、日清戦争後である。佐野によると、一番古くから残っているソメイヨシノは、日露戦争の戦勝記念で植えられたものだという。忠魂碑が建てられた記念公園や連隊の駐屯地（佐野曰く、「ソメイヨシノは軍隊と共に歩んでいる」）、城址公園、堤防や鉄道線路沿い、そして学校。このような公共空間に、国民的行事、国家行事の都度、ソメイヨシノは植樹され、全国に広がっていった。

一方、高木博志は明治20（1887）年には1本の桜も見られなかった弘前城跡の天守閣周辺が、大正初期には「桜（ソメイヨシノ）の名所」に変貌した事例を提示している[14]。元津軽藩士が荒れ果てた弘前城跡を整備しようと、明治15（1882）年に東京の上野山に倣って桜（ソメイヨシノ1000本）を私財を投じて植樹したのが最初であるという。しかしこの時の桜は、他の元津軽藩士たちに「お城に桜を植えて花見をやるとは何ごとだ／お城に町人や百姓を入れるのか」と反対され、「引っこ抜かれ」た。その後改めて明治36（1903）にソメイヨシノ約1000本が植えられ、それが今日の「北の桜の名所」、弘前城の景色の出発点となった[15]。「城に桜」の光景が、150年ほど前の日本には存在していなかったばかりか、（元）武士によって否定されていたということがわかる興味深い事例であり、またソメイヨシノの植樹が、国家によってだけではなく、民間人によっても行われていたことがわかる。実際、ソメイヨシノの植樹は地方の名望家、知識人、経済人らの呼びかけによっても行われていた。ソメイヨシノは、明治維新によって誕生した「国民」の手によっても広げられていったのである。

表している。同時に、接ぎ木で増える過程で突然変異が起こるため、「クローン」にも複数の系統があることが報告されている。（かずさDNA研究所「ゲノム解析で解き明かすソメイヨシノのルーツ：全国のソメイヨシノの源流が上の恩賜公園に」（https://www.kazusa.or.jp/news/pr20220316/）（最終閲覧日2022年12月23日））

11）勝木（2015）、49頁。桜は「自家不和合性」という特徴を持ち、同じ遺伝子を持つ桜の間では受粉が成立しない。そのため「花だけが先に咲く」というソメイヨシノの特質を受け継がせるために接ぎ木で増やされる。なおソメイヨシノ以外の桜も、古くから接ぎ木で受け継がれてきた。接ぎ木の技術は、奈良時代に中国からもたらされたという。

12）佐野の祖父、14代目佐野藤右衛門（1874～1934）は、日本全国をまわり、古い桜、由緒ある桜の保存、維持に尽力し、「桜守」と呼ばれた。その活動と名は15、16代目にも受け継がれている。

13）佐野藤右衛門（塩野米松）『桜のいのち 庭のこころ』筑摩書房、2012年（以下、佐野（2012）と略）、106頁。

14）高木博志「桜とナショナリズム」西川長夫他編『世紀転換期の国際秩序の形成と国民文化の形成』、柏書房、1999年、147-170頁（以下、高木（1999）と略）；高木博志「桜」板垣竜太他編『東アジアの記憶の場』河出書房、2011年、263-287頁（以下、高木（2011）と略）。

15）同上、161-164頁。弘前城跡へのソメイヨシノの植樹は、HNK歴史秘話ヒストリアでも取り上げられている（「弘前城：北のお城の400年、第三部、サムライ、桜を植える」2020年4月23日放映）。しかし番組では桜を称賛する一方で、桜とナショナリズムの関係については言及されていない。

それにしてもなぜ、ソメイヨシノはこのように好まれ、官民揃って積極的に植樹したのか。花だけが先に咲き、後から葉が出るという理想的な咲き方に加え、桜の中でも生育が早いこと、接ぎ木で容易に増やせるうえに根付きが良いこと、比較的安価であったことなどが理由として挙げられる。それに加えて、「鹿児島から北海道南部まで」と、生育領域が広かったことも、ソメイヨシノが新しい時代、新たな「日本」に相応しい桜として受容／活用されていったことの一因であろう[16]。ソメイヨシノが誕生して初めて、「日本の領域の大半で、同じ桜を見る／愛でる」という経験が可能となったのである。ソメイヨシノは日本という「空間」を急速に埋め、同じ景色（そして同じ「花見」という習慣）を共有させていった。これが、後の章で見ていく「桜によるナショナリズムの喚起」につながっていく。

一方で、このソメイヨシノの拡大を非難する者も存在した。先述した16代目の祖父にあたる、14代佐野藤右衛門は全国の多様な桜の保護や保存に尽力し、明治35（1902）年に来日した際に日本の「多様な桜」に魅入られ、多くの桜をイギリスに持ち帰ったコリングウッド・イングラムと協力し、「太白」という桜を日本に「里帰り」させたりもした[17]。他にも在野の「桜愛好家」、例えば「櫻男」と自称した笹部新太郎のように、ソメイヨシノを嫌い、古い桜を愛し、その保護継承に奔走した者がいた[18]。しかしこのソメイヨシノ批判や「古い桜を守ろう」「桜の多様性を守ろう」という動きには、「古来より受け継がれた日本の桜とその風景を守る」という、やはりナショナリズムに回収されていく傾向を持つものであったと言える。

このような「反ソメイヨシノ」の動きもあったものの、ソメイヨシノの勢いは止まるところを知らなかった。大正時代には日本のほぼ全域を覆うようになったソメイヨシノが、さらに日本の「外」へと移植されていった過程を確認しておきたい。日清、日露戦争によって植民地（台湾、朝鮮半島、中国東北部など）を領有するようになった日本は、これら「外地」に桜、特にソメイヨシノを移植した。例えば台湾の阿里山などは、今日でも桜の名所である。朝鮮半島にもソメイヨシノが盛んに植樹され、「日本の春」と同じ景色を再現していった。「日朝同祖論」が盛んに唱えられていたこの時期に、「ソメイヨシノ済州島起源説」が日本の植物分類学者、小泉源一によって発表され、日本国内でも一定の支持を得ていたことも興味深い[19]。権錫永は朝鮮への桜の移植の拡大と、朝鮮の人々が「桜の花見」の習慣を受容していく様、そして「ソメイヨシノ済州島原産説」が独立後も残り続けた意味について論じている[20]。

16）その一方で、明治期に日本に組み込まれ、住民が同化と差別の対象となってきた沖縄（琉球）と北海道（アイヌモシリ）北部はそこに含まれない。沖縄に咲くのは濃い紅色のカンヒザクラであり、北海道の旭川、稚内の「標準木」はエゾヤマザクラである。

17）阿部菜穂子『チェリー・イングラム』岩波書店、2016年；勝木（2015）、120-122頁。

18）佐野・塩野（2012）。佐野は繰り返し「ソメイヨシノはつまらない／色香がない／ベターとしている」等発言している。

19）勝木（2015）、57-61頁。これは「桜の起源論争」と呼ばれる。日本では、国立遺伝学研究所の竹中要によるエドヒガンとオオシマザクラの交雑説が支持されている。韓国では戦後、ソメイヨシノは「日帝時代の遺産」として忌避され、切り倒されもしたが、上述の「ワンボンナム＝ソメイヨシノ済州島起源説」が1960年代に唱えられ、花見の習慣が復活した。（三橋広夫「日本のソメイヨシノと韓国のワンボンナム（王桜）の授業」『日本福祉大学子ども発達学論集』、2016年、35-44頁）。この「起源論争」は、2018年に、韓国の研究チームが「ワンボンナムとソメイヨシノは異なる」というゲノム分析の結果を報告し、決着がついた。

20）権錫永『からまりあい重なりあう歴史』、北海道大学出版会、2021年、4、5章。また高木博志は「ソメイヨシ

ソメイヨシノはまた、中国にも移植された。日中戦争が始まると上海、武漢など、日本軍が占領した場所にソメイヨシノが植えられた[21]。16代目の父15代佐野藤右衛門は「軍の仕事で上海、蘇州、杭州などに、5千本の桜を植えに行った」という[22]。また、本願寺門主であり探検家であった大谷光端に依頼され、シベリア鉄道沿いに桜を100万本植樹する計画にもかかわった。そのために育てた苗木10万本が、戦時中に食糧難が深刻になると「芋を植える土地を確保するため」伐採を強制されたこと、「この非常時に桜などを育てるのは非国民だ」と批判されたことも佐野は回想している[23]。軍や愛国のシンボルとして桜が多用される一方で、現実の桜は農地確保のために伐採され、また木炭にされたのだった。

太平洋戦争期に東南アジア各地を日本軍が占領すると、その地にもソメイヨシノが運ばれた。この「国花進駐」を支持する声も高かったが、当然のことながら気候が合わず、枯れる桜を悼む声が国内の桜の愛好家から上がったという[24]。これら「外地の桜」の多くは戦後、日本支配の象徴として伐採されたが、中国の武漢、韓国仁川大公園や鎮海のように、今日も桜の名所として観光地となっている場所も残る。

このようにソメイヨシノは、わずか半世紀余りで日本全土に広がり、さらに「日本の象徴」として植民地、占領地にも移植された。ソメイヨシノ以前と以後には、日本の春の景色は大きく変わり、さらに「桜」のイメージも大きく変わった。次章では、桜の「イメージ」に焦点を当てて、近代以前と以後の変化を追っていく。

3.「桜」のイメージの転換

最初に今日、桜がどのようなイメージで見られているかを確認しておこう。「はじめに」でも触れたように、筆者の授業ではここ10数年、毎年授業の最初に桜のイメージを聞いている。圧倒的に多い答えは「出会い」「別れ」「ぱっと咲いてぱっと散る」「お花見」である（それに「桜餅」「花見団子」「ピンク」などが続く）。そして面白いことに「ぱっと咲いてぱっと散る」の後に、「だから儚い」と書く学生と、「だから潔い」と書く学生がいる。この二つの相反するイメージは何に由来するのだろうか。また、留学生も含めて「日本の花」と書く学生も多い。「桜」と「日本（人）」の関係は、いつ、どのように形成されたのだろうか。

第1章で見たように、万葉の時代には萩、梅に比べて少なかった桜を詠む歌は、平安時代に逆転した。桜に付与されたイメージとその変化については、和歌の中での詠まれ方、物語や絵画の中での描かれ方、能や歌舞伎といった舞台芸術の中での扱われ方など、多方面から研究が行われている。さらに明治以降、ソメイヨシノが出現し広がっていくなかで、桜に新なイメージ（と機能）が加わったことについても詳細な研究が存在する。以下、桜のイメージの変遷について、連続性と断

ノ済州島起源説」について、小泉の「ソメイヨシノ批判」という側面から紹介している（高木（2011））。

21）佐藤（2005）、130頁。

22）鈴木嘉一『桜守三代』平凡社、2012年、82頁。

23）同上、83-84頁。

24）佐藤（2005）、130頁。

絶の両方からみていこう。

桜の「詠まれ方」に関しては、万葉集の頃は「盛り」を称えられていた桜が、古今和歌集以降、「散り際」を愛で、惜しむように変化していったことが指摘されている。桜を愛した小説家田辺聖子は、桜の詠まれ方の変化を二つの和歌で表し、自身は後者を好むと書いている[25)]。

見渡せば春日の野辺にかすみ立ち咲き匂へるは桜花かも（万葉集）
みよしのの高嶺の桜散りにけり嵐もしろき春のあけぼの（新古今和歌集）

また古代より桜は「女性」イメージであったという見解が広く共有されている。小川和祐は『桜文化と日本人』の冒頭部分で、万葉集の歌を引きながら「桜は本来、美しい女身であった」と書いている[26)]。高木もまた「（江戸後期の桜は）「庶民の花」、イメージとしては「女性の花」であった」と述べている[27)]。大貫恵美子は古代の桜（生の象徴）から太平洋戦争期の特攻精神（死の象徴）まで、桜のイメージの変遷を追った大著『ねじ曲げられた桜』のなかで、近代以前の「女性（の比喩）としての桜の花」（男が愛する女性を桜に見立てる）が、明治以降「軍人、兵士」という男性イメージに転換し、最終的には「お国のために潔く死ぬこと」（特攻精神）に結実したと結論付けている[28)]。

このように近代以前は女性、近代以降は男性、とイメージが逆転したとされる桜であるが、その間をつなぐ興味深い事例が２つある。ひとつは江戸時代の歌舞伎の演目「仮名手本忠臣蔵」のなかの「花は桜木、人は武士」という台詞である。ここで桜は武士（男性）と結びつけられている（これについては、「単に花は桜が一番、人は武士が一番（良い）」という意味であったのが、明治時代に新たな意味を付与された」という解釈や、歌舞伎は町人の娯楽であり、当の武士には縁遠いものであったといった指摘もある）[29)]。もうひとつ、興味深い事例として、佐伯順子による「桜＝美少年イメージ」を挙げておこう。佐伯は著書『男の絆の比較文化史』を「美少年は、つねに桜とともにいる」という一文から書き起こし、女性だけではなく「美少年」が桜に喩えられてきた事例を提示した。日本において、男色は平安時代の僧侶、貴族にはじまり、武士階層へと広がり、江戸時代には町人層にまで浸透していた。佐伯は室町時代の稚児物語や御伽草子、江戸時代の歌舞伎のなかで、少年が桜に喩えられていること、そのイメージは基本的に「儚さ」（少年の美の儚さ、移ろいやすさ／少年の命もまた儚く散る定め）であることを指摘している[30)]。ただそのなかでひとつ、桜の「潔い」というイメージに繋がる事例も紹介されている。それは物語のなかの「武家の男色」である。佐伯は井原西鶴の『男色大鏡』（1767 年）を資料として、武士の男色が「果たし合いと流血」に至るものとして描かれていること、また三角関係の末の「果たし合い」（と桜に喩えられる少年の死）が「武士の潔さ」として物語のなかで称揚されていることを確認している[31)]。

25）田辺聖子『文車日記』、新潮社、1974 年、100 頁。
26）小川和祐『桜文化と日本人』竹林書房、2011 年、6 頁。
27）高木（1999）、154 頁。
28）大貫多恵子『ねじ曲げられた桜』岩波書店、2003 年（以下、大貫（2003）と略）。
29）同上、231-232 頁。
30）佐伯順子『男の絆の比較文化史』岩波書店、2015 年。
31）同上、92-98 頁。

このような日本の「伝統」ともいえる男色は、明治期に入ると西洋的価値観の導入に従って「同性愛」（当時の分類では「病」）として、抑圧されていくことになる。同時期、桜のイメージは「女性」、「少年」（＝儚さ）ではなく「男性」、特に「軍人」（潔さ）に転化した。この桜イメージの変化の背景には、明治期に導入された徴兵制、つまり「国民軍」の形成と、日清、日露戦争という「戦争体験」（および勝利体験）が大きく働いていた

江戸時代までは、特権階級である「武士」だけが「戦う人」であり、刀（武器）を所有、携帯する権利と義務を帯びていた。それが明治期、身分制が解体され、成人男性全てが基本的に兵役の対象となり、戦時には戦場に送られる＝戦うという義務を帯びた時、男性全員が「戦う人」＝疑似「武士」という立場を得たと言える[32]。そして、江戸時代には物語や歌舞伎のなかで展開されていた、「主君のために死ぬ」（忠臣蔵）、「愛する男性（と自身の名誉）のために死ぬ」（武家の少年）という武士のイメージは、「お国のために／天皇陛下のために死ぬ」へと転化し、桜イメージは「兵士＝男性」へと転換した。

そしてこの明治期、まさに日本が近代国家形成に邁進するなかで、桜の比喩を使って「日本人」を語る言説が出現してくる。桜と軍隊の関連も深かったが、それ以上に、「日本人」全体を表現する（そして称える）ツールとして、「桜」が語られるようになるのである。「女性」「美少年」「武士」と喩えられてきた桜が、どのように「日本人」全体を語るツールとされたのか、次章で検討していこう。

4．桜と武士道と集団主義

「武士道は日本の象徴である桜花と同じように、日本の国土に咲く、日本の華である」。これは明治33（1900）年、アメリカで出版された新渡戸稲造の『武士道』（Bushido）の書き出しの一文である。明治期の教育者、思想家、そしてキリスト者であった新渡戸は、西洋の「騎士道」に比するものとして、日本の「武士道」を西洋諸国に向けて紹介した。このテキストの後半には、「桜と武士道は大和魂の象徴」と題された節があり、そこでは以下のように、「武士道」が「日本人」全体に拡大され、また桜のイメージと重ね合わせられている。やや長くなるが、引用しよう。

> 武士道は、その生みの親である武士階級から様々な経路を辿って流れだし、大衆の間で酵母として発酵し、日本人全体に道徳律としての基準を提供したのだ。もともとはエリートである武士階級の栄光として登場したものであったが、やがて国民全体の憧れとなり、その精神となったのである。もちろん大衆はサムライの道徳的高みまで到達はできなかったが、武士道精神を表す〈大和魂〉（日本人の魂）という言葉は、ついにこの島国の〈民族精神〉を象徴する言葉となったのだ[33]

32）実際、軍隊では徴収兵を「疑似士族」として扱った。

33）新渡戸稲造『武士道』PHP研究所、2005年（以下、新渡戸（2005）と略）、131-132頁。新渡戸の『武士道』については、大貫の分析も参照（大貫（2003）、188-194頁）。

武士道は、武士だけのものではなく、その高潔な精神性は「日本人」全体を感化し、今や「武士道」は日本人全員に共有されている、というのが新渡戸の主張である。続けて本居宣長の和歌、「敷島の大和心を人問はば朝日に匂う山桜花」が引用され、「桜こそは古来よりわが日本民族が愛した花であり、それは「国民性」の象徴でもあった」、そして、ヨーロッパの人々が賞賛する薔薇が生に執着するのに比べて、桜は「自然のなすがままにいつでもその命を捨てる覚悟がある」[34]。この時新渡戸が思い浮かべたのはソメイヨシノだっただろうか。それともヤマザクラだったろうか。それを知る術はないが、新渡戸の『武士道』が、武士を「日本人（男子）」全体に拡大し、その生きざま（死にざま）を「桜」に喩えたことは、その後の内外の「日本人（男子）＝サムライ」観、そして「桜＝日本（の国民性）の象徴」観に大きな影響を与えた[35]。さらにこの『武士道』は、（古くから唄われ、愛でられてきた）桜と、（古くからのエリート層である）武士を「今の日本人」と結びつけることによって、過去から今日までのひとつながりの「日本」を想像させる、「時間の国民化」にも寄与したと言える。

また同時期、桜を日本人の「集団主義」と結びつける言説も出現している。その代表として、大正時代の国語教科書にも載せられた、井上哲次郎（1856 ～ 1944 年、哲学者、ドイツ留学を経て東京帝国大学教授）の「桜花」の有名な一節を挙げよう。

> 桜花は孤独的にあらずして集合的なり。集合的の花は独り桜花に限らずといえども、これを蓮花もしくは薔薇に比すれば、ことにその相違の甚だしきを見る。（中略）いずれも個人主義を表現する者の如くあり。独り桜花は大いにこれと異なり。（中略）桜花の長所はその集合的なるあり。一個一個の花よりは、一枝の花の集合体を以て優れりとなす。一樹の花よりは、全山の花の集合体を以て優れりとなす。此の如きは我が日本民族の長処が個人主義にあらずして、むしろ団体的活動にあるを表現してあまりあるというべきなり[36]。

西洋を薔薇に、日本を桜に喩えるのは新渡戸と同様である[37]。そして新渡戸の『武士道』には

34）評論家小林秀雄は『本居宣長』（1977）のなかで、「宣長自身の桜を愛する思いを素直に歌ったものが、明治以降、日本に結び付けられ、ナショナリズム的に解釈されるようになった」と論じている（小林秀雄『本居宣長』新潮社、2002 年）。また小林には「学校に植えられている桜は文部省と植木屋が結託して植えた（だから山桜に比べると俗悪）」という発言もある（国民文化研究会『学生との対話／小林秀雄講義』新潮社、2017 年）。

35）新渡戸がこの本を執筆した時には、すでに「階級、集団としての武士」は存在しなかった。だからこそ新渡戸は「武士道は日本人全員のもの」と書くことができたのであろう。また、『武士道』の中で日本人女性は「女性が夫や家、そして家族のために身を犠牲にするのは、男性が主君と国のために身を捨てることと同様、自分の意志に基づくものであって、それは名誉ある立派なこととされた」「女が家庭に尽くすことは、男が主君に忠義を尽くすことと同じように、人生の最大の基本であった」「妻は夫のために自分を捨て、夫は主君のために自分を捨て、主君は天の命に従う奉仕者であった」と書かれている。「自己犠牲」、そして「内助の功」。これが日本人女性の「武士（の妻）道」であった（新渡戸（2005）、117-120 頁）。このような「サムライとその妻」のイメージ、そして「桜と武士」の結びつきは、2000 年に公開された日米合作映画「ラストサムライ」でも踏襲されている。

36）国定教科書『高等小學読本』（復刻版）、大空社、1991 年。

37）この西洋＝薔薇、日本＝桜のイメージに関しても、大貫恵美子が詳しく論じている（大貫多恵子『人殺しの花』岩波書店、2020 年）。

見られなかった「集団主義」と「日本人」を結びつけるレトリックがここに現れている。「武士道（サムライ）」と「集団主義」。これが「桜」（特にソメイヨシノ）を介して結びつけられ、戦前、戦中のいわゆる「桜ナショナリズム」を広げていった。井上の桜論が小学校の教科書に載せられたことからもわかるように、この「桜ナショナリズム」は教育現場で強く機能した。何よりも学校にはソメイヨシノが多く植えられており、春になると子どもたちは「パッと咲いてパッと（潔く）散る桜」を毎年のように目にしていた。日清戦争の頃からは、子供たちが学校で歌う唱歌[38]のなかに「戦争」「進軍」「征伐」といったテーマや文言、そして「天皇／国家のために桜のように散る」という歌詞が数多く登場している[39]。その最終形態が、昭和7（1932）年から使用された小学校1年生用の国語教科書、「サイタサイタサクラガサイタ」から始まる『サクラ読本』であると言えよう（教科書では「ススメススメヘイタイススメ」と続く）。子供たちは桜に取り囲まれていたのである。

ここまで見てきたように、明治以降の「桜」、特にソメイヨシノは、江戸時代までの桜にはなかった「軍隊」、「愛国」、そして「日本人」というイメージを付与された。特に太平洋戦争末期には、桜（のように潔く散る）は特攻の象徴ともなった。最後にこの「特攻と桜」を緊密に結びつけた軍歌、「同期の桜」を取り上げておきたい。太平洋戦争期、海軍を中心に、様々なヴァージョンで歌われ、何よりも特攻の象徴とみなされた歌である。これまでも様々に論じられているが、ここでは1番と5番の歌詞を挙げておこう。

貴様と俺とは同期の桜／同じ兵学校の庭に咲く／
咲いた花なら散るのは覚悟／みごと散りましょ国のため

貴様と俺とは同期の桜／離れ離れに散ろうとも
花の都の靖国神社／春の梢に咲いて会おう

この歌の元になったのは、詩人西条八十が昭和13（1938）年に発表した詩「二輪の桜」（戦友の唄）である。この詩に曲が付けられ発売されたレコードが元となり、海軍を中心に「替え歌」が広がった（最初の替え歌は、後の海軍大尉帖佐裕によるものとされる）。兵士（特に特攻隊員）と桜、「国のために」潔く散る、靖国神社の桜への生まれ変わり等々、ここまで見てきた明治以降の桜のイメージが全て詰め込まれたような歌詞である。

一方、西条八十の元の詩もまた興味深い。1番と3番の歌詞を見てみよう。

君と僕とは二輪の桜／同じ部隊の枝に咲く
血肉を分けたる仲ではないが／なぜか気が合うて離れられぬ

38）唱歌が「国民づくり」に積極的に活用されたツールであったことは、渡辺裕『歌う国民』中央公論新社、2010年（以下、渡辺（2010）と略）に詳しい。また（国歌などを）同時に歌うことが「想像の共同体」を形成する重要なツールとなることを、ベネディクト・アンダーソンは強調している（ベネディクト・アンダーソン（白石隆、白石さや訳『定本　増補 想像の共同体』書籍工房早山、2007年）。

39）大貫（2003）、217頁。

君と僕とは二輪の桜／共に皇国の為に咲く
昼は並んで夜は抱き合うて／同じ夢みる弾丸の中

この詩は昭和13（1938）年の『少女倶楽部』1月号に掲載された。『少女倶楽部』という、女子を対象とした雑誌に載っている点も考察の対象となろうが、ここでは西条の元の詩が、明治以前の「男色の桜」イメージを含んでいる（ように見える）点を指摘しておきたい。「男色」は「（男性）同性愛」と名を変え（られ）ながらも、実際には旧制中学、高校における「硬派」の世界に継承されていた。ソメイヨシノ以前とソメイヨシノ以後、近代以前と近代以降の桜、そこには断然がありつつも、このように継承されるものがある。同様のことが、戦前の「桜」と戦後の「桜」にも言えるだろう。渡辺裕は「戦前の置き土産」という言葉で、「戦前に対する反省から文化のあり方を大きく変えたにせよ、他方でそのベースのかなりの部分を戦前の蓄積に追っていることは間違いありません」と述べている[40]。次章では戦後、どのような「断然」があり、どのような「継承」が見られるのか、そして今日の「桜」がどのようなイメージと、どのような機能を持っているのかについて考察していく。

5．戦後の桜

ここまで、駆け足にではあるが、日本における「桜」（イメージ）の変遷を見直してきた。明治以降のソメイヨシノの拡大につれて、桜と国家（特に軍隊）が強く結びつき、最終的に「桜」が「特攻（精神）」の象徴とされたことは、大貫の研究を筆頭に多くの先行研究で指摘されている。桜（特にソメイヨシノ）が一種の文化装置、国民国家を形成し維持する国家イデオロギーの一部として機能したこと、つまり「国民化」の装置のひとつであったことは疑いない。

それではこの「桜」と「軍隊」、桜と「国家」、そして桜と「日本（人）の結びつきは、敗戦後、どのように変化したのだろうか。

敗戦直後の日本には、桜に対する複雑な感情が存在した。例えば特攻隊員として訓練中に終戦を迎えた経験を持つ作家城山三郎は、2006年の朝日新聞の特集インタビュー「桜の国で」において、「いまだに気楽に眺められない。満開の横を通る時は、つい足早になってしまう」と答えている。同じ特集で歌人岡野弘彦は、学徒兵だった昭和20年4月13日、東京で空襲に遭い、炎に包まれる満開の桜を見たと語り、夥しい遺体を焼き、その後移動した茨城で再び満開の桜を見た時「おれはもう、一生桜を美しいとは思うまい、思えまい」と感じたと述べている[41]。また同特集でノンフィクション作家辺見じゅん（『男たちの大和』の著者）は、戦艦大和の生存者の「出陣する前、まだ蕾だった桜が、九死に一生を得て佐世保へ帰ると満開に咲いていた。何人かが花を見て狂ったように泣き叫んだ。『俺たちが命がけで戦って、みんな死んだのに、なんで桜が咲いていやがんだ』」という証言を紹介している[42]。城山と同じく特攻隊員として終戦を迎え、戦後、資料を焼かれ痕跡を

40）渡辺（2010）、112頁。
41）朝日新聞、2006年3月31日、「桜の国で」⑤。
42）朝日新聞、2006年4月3日、「桜の国で」⑥。辺見のノンフィクション『男たちの大和』（1986年）の6章は

消された鹿児島県万世の特攻基地跡に祈念館を建てることに人生を注いだ苗村七郎は、戦後、居酒屋で「同期の桜」を歌う若い人をどなりつけたという[43]。

このように戦後しばらく、桜（ソメイヨシノ）は戦争の記憶をその身に纏っていた。有岡利幸はこの状況を「桜アレルギー」という言葉で表現している[44]。岩崎文雄もまた、戦前、戦中に様々な歌に登場した桜が、昭和30年代半ば（1960年ごろ）まで、流行歌のなかにはほとんど出てこないと指摘している[45]。

文学の世界においても、戦後しばらくの間、桜は否定的なイメージで描かれたと小川和祐は論じている。小川は昭和22（1947）年に発表された坂口安吾の『桜の森の満開の下』を、「古代のアニミズムと密教が作り出した怨霊を、屍体を積み上げた敗戦直後の東京に呼び出した小説」と呼び、主人公の山賊が、自身を殺戮へと駆り立てた女を自らの手で葬った時に感じた「彼自身の胸のかなしみ」の「ほのあたたかいぬくもり」を、「戦争によって失われた数百万のひとびとの死に捧げられた悲しみ」と評する。そしてこの小説を「散華の桜」との決別（「軍国の花は、この小説の怨霊のように消滅した」）と見なし、「明治以降、全国に植樹されて普及した各地の桜は、時代の悪夢として伐採され、あるいは放置されるままに枯死し、人々の意識から消え去った」と書くのである[46]。

しかし今日、ソメイヨシノは再び学校に、公園に、堤防にと、あらゆる所に植えられ、春になると「一斉に咲き、一斉に散る」姿が（時間差で）全国を覆う。ソメイヨシノはいつ、どのように復活したのだろうか。

ソメイヨシノの復興、つまり再び計画的植樹が始まった時期については、研究者によってばらつきはあるが、昭和34（1962）年から始まる高度経済成長から昭和39（1964）年の東京オリンピック開催あたりとされる。ただ、早い段階での植樹の例として、昭和31（1956）年および昭和33（1958）年に広島平和記念公園にソメイヨシノが植樹された例が挙げられる。有岡は昭和38（1963）年と昭和48（1973）年の2回にわたってアルゼンチンから来日した桜研究家、賀来九平が、1回目の訪日では「（荒れ果てた）故国の桜にがっかりした」が、2回目には「桜の植栽と桜を守る運動が盛んになっている様に驚いた」という事例を紹介している[47]。

一方小川は、「桜を守ろう」という動きが活発化したきっかけとして、昭和44（1969）年に公刊された水上勉の『桜守』を挙げる。「開発に伴う伐採で荒れ果てた山野を嘆き、失われつつある日本の多様な桜を守ることに人生を掛けた男」の物語が、「（古来よりの）桜への愛」と桜を守ろうという機運を高めた」[48]。この小説には、「ソメイヨシノの拡大に抵抗し、古い桜を守ろうとする」、笹部新太郎と15代目佐野藤衛門をモデルとした人物が登場している。ソメイヨシノを飛び越えて、

「桜」と題されており、生き延びた乗組員たちがそれぞれ桜に複雑な思いを抱く様が描かれている。

43）清武英利『同期の桜は唄わせない』ワック、2013年、プロローグ。

44）有岡利幸『ものと人間の文化史137-Ⅱ 桜Ⅱ』法政大学出版局、2007年（以下、有岡（2007）と略）、153-154頁。戦後数年は、花見も下火になったという。

45）岩崎文雄『桜の文化史』北稜館、2018年（以下、岩崎（2018）と略）、222頁。

46）小川和祐『桜と日本人』新潮社、1993年（以下、小川（1993）と略）、120-130頁。

47）有岡（2007）、159-160頁。

48）小川（1993）、161-171頁。

「古い桜」（ヤマザクラなど）と戦後の日本を繋げようとする傾向のなかに位置付けられるだろう。しかし、やはり植樹の中心となったのはソメイヨシノであった。明治100周年（1968年）の記念事業としてのソメイヨシノ植樹も多く行われた（例えば大阪城公園の整備とソメイヨシノの植樹）。さらにそのような大規模な整備だけでなく、新たな住宅地が開発されると、そこにソメイヨシノが植えられる傾向が全国的に広がった[49]。

国内だけでなく、国外への桜の移植も復活した。「友好の記念」として桜を外国に寄贈することは戦前から行われていたが（ワシントンD.C.のポトマックの桜の寄贈が有名である）、それが今日、より広い範囲と頻度で行われている（例えば2015年の日ラオス外交樹立60周年記念としての、ラオス北部ファタン県への桜の寄贈）。また外務省を通しての公的な桜の寄贈だけでなく、地方自治体による友好都市への寄贈（例えば東京都からモスクワへ）、民間団体による寄贈（例えば「育桜会」から台湾へ）もまた行われている。特に公益財団法人「日本さくらの会」[50]は、さくらを通した国際・文化交流事業として、これまで世界各地の63カ国に桜を寄贈している。しかしこれらの「友好活動」に際して、かつて植民地や占領地に植えられたソメイヨシノの歴史は「忘却」および「封印」されてしまっている。

本章の冒頭でみた「桜を美しいとは思えない」と語った人たちにも、変化は訪れている。城山三郎は、先に引用したインタビューの最後で、小川和祐の『桜と日本人』を読んだことをきっかけに「散華の花」のイメージが少し和らいだ、と語っている。岡野弘彦もまた、深い傷は50歳を過ぎたころようやくやわらぎ、今では桜の歌も詠むと述べた。苗村七郎が建設に尽力した鹿児島県万世の特攻平和祈念館の前にはソメイヨシノの並木道が広がる。桜を正面から見られない、美しいと思えない「日本人」がいたことは、今日、当人たちも含めて、こちらもまた忘れられていくように見える。

岩崎文雄は『桜の文化史』のなかで次のように述べている。

> （前略）サクラは軍国主義的思想によって数奇な運命をたどってきたが、戦後50年以上も経て、敗戦後の苦しみを知らない人たちが多くなるにつれて、暗いことを連想させるサクラから開放されるべき時期がきたように思われる。この時期に到達した平成の現在こそ、我々はいま一度、サクラと日本人の関係を見つめ直して、サクラの美しさに対する我々の感動のパターンを次の世代に伝えなければならない。それが伝統に対する我々の責務であるように思われる[51]。

「我々」が伝えなければならないのは、何なのだろうか。「敗戦後の苦しみ」をもたらした「戦前の桜」イメージは、全て消え去ったのであろうか。次章では、学生へのアンケートを通して、「今日の桜」について見ていく。

49）「新設の学校や小公園、暗渠、住宅地の街路、そんな身近な空間にも、ソメイヨシノは進出していった」（佐藤（2005）、160頁）。

50）公益財団法人日本さくらの会は、東京オリンピックの年に「急激な開発、公害などにより、悲惨な状況にあるさくら」の愛護、保存、育成、普及を目的に、超党派の国会議員有志によって設立された。代々の会長を衆議院議長が務め、国内外に桜の寄贈や交流事業を行っている。

51））岩崎（2018）、223頁。

6．桜アンケートから見えること

ここまで見てきたように、戦後の一時期避けられた桜（ソメイヨシノ）は高度成長、東京オリンピック、そして明治100年記念を境に、再び積極的に植樹され、拡散していった。それによって「日本」という空間は再びソメイヨシノで覆われ、「同じ景色を共有する」国民共同体が再形成されたと言えよう。また「ソメイヨシノ以前の古い桜の称揚」は、（軍国主義の歴史をソメイヨシノに押し付け、排除しながら）過去から現在までの時間を再び繋ぎあわせていった[52]。「再生」のきっかけのひとつが東京オリンピックという「ナショナリズムの祭典」であったことは象徴的と言えるだろう。

そして21世紀の現在、桜はどのように描かれ、語られ、またどのようなイメージを帯びているだろうか。

冒頭から何度か言及しているように、15年ほど前から、大学の講義（比較文化論）で、２回生から４回生まで、留学生も含む学生たちに、以下の質問を行っている。

①「桜」と聞いて何を思い浮かべるか。
②「桜」と聞いて、どんな歌が思い浮かぶか。
③「お花見」スポットとして思い浮かぶ場所はどこか。

１つ目の問に対する学生たちの答えは、この間ほとんど変わらない。「出会い（入学式、新学期）」、「別れ（卒業式）」、「新たなはじまり」、「パッと咲いてパッと散る」（儚い／潔い）」、「お花見」（桜餅、花見団子）、そして「日本の花」。これは留学生たちもほぼ共通して持つイメージである[53]。「出会い（入学式）」と「別れ（卒業式）」、これは学校教育が制度化され、またその学校にソメイヨシノが積極的に植樹された明治時代半ば以降に、桜に新たに加わったイメージである。「軍隊」「軍国主義」イメージが、敗戦とその後の「桜アレルギー」期に抜け落ち、学校に付随するイメージが残ったと考えられる。「パッと咲いてパッと散る」から「潔い」という連想は、ソメイヨシノ特有の、そして軍国主義や特攻精神の名残と言えるかもしれない。その一方で「入学式」「卒業式」イメージには、「東北／北海道出身なので、京都に来て初めてその意味がわかった」と書く学生もいることを付け加えておこう。

留学生たちのイメージはどうだろうか。例年100人弱の受講生のうち、留学生は10名程度であり、中国および韓国からの留学生が大半を占める。彼ら彼女らもまた「入学式」「卒業式」、そして「日本の花」と書くことが多い。

２つ目の「桜の歌（桜ソング）」には、驚くほど多くの歌が挙げられる。「桜」（森山直太朗）、「桜坂」（福山雅治）、「桜」（コブクロ）、この３曲が例年トップ３を占め、それに続いて「さくら」（ケッ

52）佐藤は戦後の「桜語り」について、ソメイヨシノ以前の「元々の」のサクラとしてヤマザクラを称揚し、それを日本人とつなげるような「始原の語り」が虚ろになぞられていくと評している。「桜が出てくると、なぜか突然「古来から」や「日本人」が呼び出されてくる」（佐藤（2005）、171-175頁）。

53）ただ、まれに「桜の下には死体が埋まっている」（梶井基次郎）、「桜の森の満開の下」（坂口安吾）といった文学、演劇イメージを挙げる学生はいる。

メイシ)、「SAKURA」(いきものがかり)、「サクラ咲ケ」(嵐)、そして「千本桜」(初音ミク)を挙げる学生が多い。しかしその他にも、以下のような様々な歌い手による「桜ソング」が挙げられる。スピッツ、JUJU、星野源、ファンモン、ケイジュ、aiko、KANA-BOON、GreeeN、三代目 J.S.B、AKB48、夏川里美……リストはまだまだ続く。これほど多くの歌のテーマになる花は、少なくとも日本では他にはないだろう。戦前の唱歌や軍歌、さらに(それこそ「古来からの」)和歌に詠まれた桜を想起させる現象である。

ただ、これらの歌には大きな特徴がある。学生たちの挙げる歌のほとんどが 2000 年代に入ってから作られたものなのである。福山雅治の「桜坂」が 2000 年、森山直太朗の「さくら」は 2003 年、コブクロの「桜」が 2005 年。もちろん学生たちの年齢もあるだろうが、しかしながら戦後長らく、このような皆が知っている桜の歌は存在していなかった。前章で、敗戦後から 10 数年間、「桜」が歌われなくなったことに触れたが、その後も 1990 年代までは、ポピュラーミュージックの領域で「桜」を前面に出す歌はあまり見られない[54)]。まして大ヒットし、多くの人に共有されるような「桜の歌」は出てこなかった。それを考えると、2000 年代の「桜」ソングの出現とその人気、つまり「若者」が桜を歌い、それが社会の各層に受け入れられるという現象は、大きな変化(あるいは回帰)と言ってよいだろう。

歌の歌詞から、桜についてのイメージを見てみよう。大半を占めるのは「恋の歌」である。「出会い」と「別れ」、特に「別れ」の歌が多い。一見、近代以前の「恋」の和歌を思い起させる。福山の「桜坂」、コブクロの「桜」もこの範疇に入る。

そのなかで森山直太朗の「さくら」は「君」が恋人ではなく「友」である点に特徴がある。サビの部分を抜き出してみよう。

さくら　さくら　今咲き誇る
刹那に散りゆく定めと知って
さらば友よ　旅立ちの刻　変わらないその想いを　今

さくら　さくら　ただ舞い落ちる
いつか生まれ変わる瞬間を信じ
泣くな　友よ　今惜別の時　飾らないあの笑顔で　さあ

さくら　さくら　いざ舞い上がれ
永遠にさんざめく光をあびて
さらば友よ　またこの場所で会おう
さくら舞い散る道の上で

54) 例えば、1980 年代に絶大な人気を誇った松任谷由実の曲で、桜を直接歌ったものは驚くほど少ない。「桜ソング」に数えられることのある「春よ来い」(1994 年)も、歌詞の中に「桜」は出てこない。

「同期の桜（二輪の桜）」から軍隊色を抜いたら、このような歌詞にならないだろうか。実際この曲は2019年、ドラマ「同期のサクラ」の主題歌となった[55]。こうして見ると、学生たちが挙げた21世紀の「桜ソング」の多くが「またいつか、どこかで会おう（会いたい）」という再会の望みを歌っているのである[56]。

留学生たちの回答についても見ておきたい。基本的に、日本の学生とほぼ同じような日本の桜ソングが挙がるが、8年ほど前から、韓国からの留学生たちが「桜エンディング」という韓国の曲（2012）を挙げることが多くなり、この傾向は年々強まっている。これについては、問3の「桜（花見）の名所」と併せて論じたい。

3つ目の「桜の名所」に挙げられるのは、京都の学生らしく、平野神社を筆頭に二条城、円山公園、清水寺、醍醐寺や嵐山（桂川沿い）、出町柳（鴨川沿い）、木屋町（高瀬川沿い）、蹴上インクライン、哲学の道（ともに疎水沿い）などが並ぶ。そして関西の「大阪城」、「姫路城」、「彦根城」、夙川、万博公園、造幣局など。全国区では弘前城、岡山城、犬山城、目黒川など。このように「桜の名所」としては川沿い、公園、神社仏閣そして城址公園が見事に出揃うが、やはりソメイヨシノの優勢が感じられる。

留学生たちはどうだろうか。日本の桜の名所を挙げる学生が多いが、中国からの留学生は武漢を挙げることもある。「最初は日本軍が植えた桜だが、その後日本企業からの寄贈があり、今は友好の桜です」と書き添えられているものもあった。韓国からの留学生も仁川大公園、鎮海といった韓国の桜の名所を挙げる率が年々高まっている。「昔、日本が植えた桜だが…」と書き加える学生もいる。留学生たちが、このようなポストコロニアルの桜を体感しているのに対し、日本の学生の無邪気さは対照的である。もちろん100名弱の、関西の学生が多い授業であり、これを平均とすることはできないが、興味深い結果と言える。

そしてアンケート後、学生たちに、桜のイメージが明治以前と以後で大きく異なることや、現在の「桜の名所」の大半が明治期以降に国家政策として整備されて成立したこと、何よりもそれらの「名所」で毎年咲き乱れる桜＝ソメイヨシノが、江戸時代までの日本には存在しておらず、また「接ぎ木」で増やされ同じ遺伝子を持つ、いわば「クローン」であることを伝えると、学生たちは毎年、変わらず驚き、時に動揺する。

最初に紹介したようにショックを受け、「知りたくなかった（桜を楽しめなくなりそう）」と嘆く学生もいるが、「文化は自然に生まれるのではなく、故意に作られる側面もあるということを学んだ」、「『創られた伝統』をはじめて実感した」という感想を述べる学生もいる。「（桜に対し）このような

55）この曲は元々友人の結婚式をきっかけに作られたものだというが、2019年、ドラマ「同期のサクラ」の主題歌となり、新ヴァージョンが発表された。ドラマは、建設会社に就職した「サクラ」という名の主人公とその同期社員4名の群像劇（社内外での「戦い」？）であった。これは「同期の桜」の記憶の上書きなのだろうか、それとも形を変えた継承なのだろうか。

56）ただ、当然のことながら、そこに収まりきらない「桜ソング」も存在する。星野源「桜の森」（2015）は、坂口安吾の『桜の森の満開の下』を連想させる歌詞と陽気なリズムが何とも不思議な曲である。ボーカロイドの草分けともいえる初音ミク「千本桜」（2011）は「ヨナ抜き」と呼ばれる、ファとシの音を抜いた曲調が「日本らしさ」を感じさせると言われており、またその歌詞は大正ロマン的かつ戦闘的であり、宴で踊り、歌いながら、反戦と愛国と革命と恋を同時進行させる。「桜」イメージを全て詰め込んだ感満載の興味深い曲である。

イメージを持っていたりするのは、明治時代以降に作られた流れであるということに、少し恐怖心的なものを感じました。なぜなら、文化を意図的に操作することの可能性を感じたからです。もしその操作する力が悪い方向に使われてしまったら…と考えると怖かったです」など、「怖さ」を感じたという声があがる一方で、「伝統や文化の『創られた』側面を理解することの面白さに気づいた」というポジティブな感想もある。桜のイメージとして「日本人ならみんな好き」と答えた学生たちに対し、別の学生が「みんな、という言葉に違和感がある。排他性を内包しているのでは？」と指摘し、議論が深まった年もあった。「お金（お札と硬貨）のあちこちに桜があった！」という発見を伝えてきた学生もいる。「当たり前と思っていたことの意味、背景を一歩踏み込んで知ること、考えることが、異文化の受け入れにも役に立つと思う」と考える学生もいる。感想は一様ではないし、一様でなくていい。「桜」を通して、小さなひっかかりを、受講した学生１人１人の内に残したい。

おわりに―平和、鎮魂、愛国

前章では2000年代に入る頃から「桜ソング」が活発化したこと、またそのなかに、近代以前の桜のイメージ（恋）、近代国家が整備した「学校」が生み出したイメージ（入学、卒業）とともに、戦時期の桜のイメージ（再会）もまた受け継がれていることも確認された。福山の「桜坂」、森山の「さくら」、コブクロの「桜」が発表された時期は、2002年日韓（韓日）ワールドカップ開催、日の丸の旗を振り、日の丸のペイントを顔に施したサポーターがテレビの画面に映し出され、「日の丸の解禁」と言われた時期と重なる。このワールドカップ後、日本内では「嫌韓」がブームとなり、2006年には第一次安倍内閣が誕生した。精神科医香山リカの『ぷちナショナリズム症候群』の出版は2002年である。2000年代の「桜ソング」の出現には、このような時代と連動している。

この時期、ひとつの「桜」をモチーフとした物語が発表され、注目された。こうの史代『夕凪の街 桜の国』（2004年）は、敗戦後の「平和」のなかに在り続ける原爆、被爆の問題を描いた漫画である。桜は、被爆２世が主人公となる第２部の冒頭数ページとラスト数ページに、「平和」と「再生」、そして「祈り」の象徴のように描かれており、本の裏表紙には満開のソメイヨシノの背景に原爆ドームがうっすらと浮かび上がる。５章でも見たように、広島の原爆記念公園には早い段階からソメイヨシノが植樹され（最初の植樹は昭和31年）、今日では300本のソメイヨシノが川沿いに植えられている。満開のソメイヨシノ越しの原爆ドームの姿は、いわば「定番」である。この公園の建設については、コンセプトの靖国神社との共通性や、「暴力の象徴が平和の象徴へと転換させられた場」という指摘がなされているが[57]、同様に「軍国主義」の象徴であったソメイヨシノが「平和」の象徴へと転じ（ねじ曲げられ）た場とみなすこともできるだろう。『夕凪の街　桜の国』は、「『平和』のなかの戦争（原爆、被爆）の継続性」を描いた珠玉の作品であるが、「桜」に注目したとき、やはりそこに一種の（意識的、あるいは無意識的な）「忘却」を指摘せずにはいられない[58]。ルナ

57）高橋秀寿「『靖国』と『ヒロシマ』―『記憶の場』の日独比較の視点から」『季刊 日本思想史』71、2007年、6-25頁；直野章子「ヒロシマの記憶風景」『社会学評論』60、2009年、500-516頁。

58）こうのは2009年に、戦中から敗戦直後にかけての軍港呉と広島を舞台にした『この世界に片隅に』を発表し

ンが140年前に看過したように、「忘却」もまた国民を形成するのである。

ここまで、かなり長いスパンで桜と「日本人（という国民）」の関係を辿ってきた。震災後の東北での「桜ライン3.11」や、近年の（「チャンネル桜」に見られるような）「愛国」と「桜」の関係など、まだまだ論じたい事例はあるものの、すでに紙面は尽きかけている。これらについては、次の課題としたい。

本稿では、ソメイヨシノ以前とソメイヨシノ後の「桜の在り方」そのものの変化、それに伴うイメージの変化、そして「日本人」という「国民」形成に桜が果たした役割について、ある程度の見取り図が示せたのではないかと思う。「古来より日本人が愛でてきた桜」、という語りとイメージは、時間を遥か過去まで遡る「国民／民族」の存在を想像させ、「同じ」ソメイヨシノが南から北へと咲き登り、その下で花見をするという経験は、「同じ空間を共有する」という「国民／民族」の存在を実感させる。戦前、戦中と海外まで広がった「空間」は敗戦によって縮小し、新たな境界線のなかで「平和」と「鎮魂」の桜が再び植えられていった。2000年代の「桜ソング」の興隆は、グローバル化の拡大に対する世界共通の「ナショナリズム」志向のなかにありながら、戦前、戦中の桜イメージを下敷きに展開している。このように見た時、件の「桜を見る会」の名称に込められた意味が、これまで以上に明瞭になるのではないだろうか。桜のなかには近代以前の「桜」には見られなかった「愛国」が、熾火のように燻っている。今回はそこまで十分に論じることができなかったが、この「桜の砦（あるいは檻）」のなかにいる限り、日本が移民、難民に開かれた国になるのは難しいのではないかと、最後に思う。

（本学国際関係学部准教授）

ており、これもアニメ化、ドラマ化され、高い評価を受けている。しかし、呉から出陣していった兵士や軍艦が、日本の外で何を行ったのかについて、全く触れられないこの作品もまた、戦争の記憶を「日本」（の地方都市）に閉じ込め、「犠牲者神話」の一端を担ってしまっているのではないだろうか。